

古代史シリーズ3

「神武東征と国つ神」



本冊子は、筆者が古代史セミナーを実施している中で、講義録を製本化したものです。

神武東征は、初代神武天皇になるイワレヒコ尊が古代大和に政権を立てるまでの国つ神との戦いと鎮撫の行程です。

古代大和政権を創り上げるにかくも苦難の軍旅であつたろうと思わせる東征の行程を通して、記紀の記述と現実にも符合する実在地を検証しながら「神武東征」を実話として学びます。

著者：情報戦略モデル研究所

井上 正和

はじめに

本冊子は、筆者が古代史セミナーを実施している中で、講義録を製本化したものです。

筆者は、以前コメーカークのS田やコンサルタントが専門でした。十年ほど前から大学での講義をきっかけに古代の文化や歴史に興味湧き、古代史のテキストを作り講義するようになりました。

元々、素人が古代史セミナーのテキストを作る訳ですから、古事記や日本書紀(以降は「記紀」という)が読めなかつたり、古代史は良く分からないと思われる初心者の方々が持たれる感覚が同様に疑問になりました。

当該古代史セミナーが以外に人気があるのは、素人の視点で不明点を解説することにあるのかもしれない。また、体系化されていて分かり易いとお褒めをいただきますが、元S田としてシステム設計やプロジェクトマネジメントで体系化することが性癖になっていることが寄与しているのかもしれませんが。

古代史シリーズ3「神武東征と国つ神」では、神武東征は、初代神武天皇になるイワレヒコ尊が古代大和に政権を立てるまでの国つ神との戦いと鎮撫の行程です。東征の行程を通して、記紀の記述と現実にも符合する実在地を検証しながら「神武東征」を実話として学びます。

本冊子は、記紀を読み解くために、参考図書を主体的に活用し記紀で裏付けをする形で進みます。図柄はウキペディアからかなり引用しています。活用しました主要参考図書は次の通りです。

- +「海道東征をゆく」(産経新聞社)
 - +続「海道東征をゆく」(産経新聞社)
 - +「日本書紀」(宇治谷 孟著、講談社)
 - +「古事記」(竹田恒泰著、学研)
 - +「住吉大社」(住吉大社編、学生社)
 - +「神武天皇の真実」(田中英道、扶桑社)
 - +「神社由緒」(宇佐大社、岡田宮、志賀海神社、宗像神社) など
- 本冊子の古代史シリーズ3「神武東征と国つ神」の全体構成は次の目次にあげて置きます。

古代史シリーズ3 「神武東征と国つ神」の目次 ◎

第一章 「イワレビコの出征・出立」 イワレビコ尊の生い立ちから日向における神武東征の準備に関わる神社とその伝承をたどります。	4
第二章 「岡田宮から浪速へ」 九州から瀬戸内海での国つ神との連携と神社・地域の伝承をひもときます。	17
第三章 「ナガスネヒコとの戦い」 倭の国つ神との敗戦から熊野へ回遊する苦難の行程と神社・地域の伝承を読み解きます。	26
第四章 「熊野八咫鳥の導き」 熊野から大和に至るまでの国つ神との戦いと鎮撫の行軍、そして熊野の神々と神社の伝承を解釈する。	35
第五章 「大和施政の始まり」 大和平安から東征を支えた功臣、脇役とイクスヨリヒメとの結婚までの記紀伝承をなぞる。	45
おわりに	60

◆第一章 「イワレビコの出生・出立」の目次

第一話 神武東征行程の全体概要	5
第二話 イワレビコ誕生	7
第三話 大和思慕	10
第四話 御船出	12
コラム：「神武東征で臣下として係る神々系図」	16

第一話 神武東征行程の全体概要

記紀の神武東征に記述される地名、神社、祭りなどは現在もほぼ同じ言葉や現物として残っている。この神話は最近の研究でも具体的に現実に結び付いた神話として捉えられている。

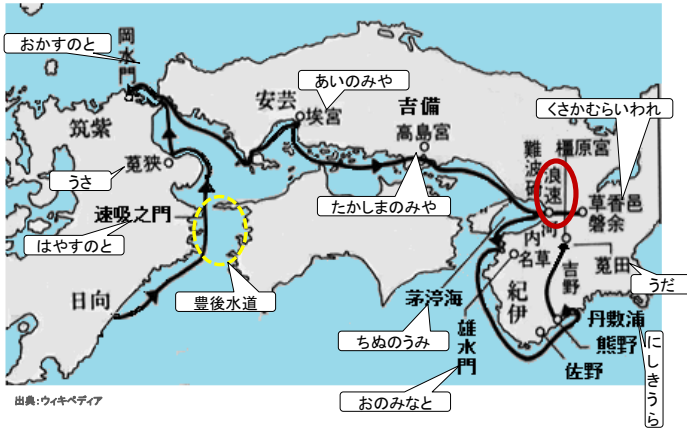
記紀に記述される神武東征は、日向から出立し大和に至る行程ですが、少し奇異に感じる点があります。それは、日向から浪速(なにわ)までの行程での出来事と浪速から熊野を廻って大和に至る行程の皇軍の状態の違いである。前者の行程は神倭伊波礼毘古尊(カムヤマトイワレビコノミコト、以下イワレビコという)への歎待と国つ神の支援のもとに軍を進めるが、後者の行程は敵味方が現れ、戦いの行程になる。

そのことは古代大和を起こしたイワレビコの時代が瀬戸内海に関連する地域は味方、近畿と畿内は敵味方の入り乱れる地域であったことを意味します。イワレビコはこのような敵味方相乱れる畿内において大王家として古代大和を創設するのですから、大和には強力にイワレビコを支援する豪族がいたことが推察できます。

まず、神武東征の行程の全体像を掴んでおきましょう。全体像を掴んでおくことで、東征での出来事をより正確に把握できると思います。神武東征の開始点は日向です。九州では瀬戸内海を安全に航行するための船団、船頭や水主(かこ)の装備をしたと思われる。それは、豊後水道(速吸之門:はやすのと)の難所を航行し、海神の神を祀る現在の宇佐神宮や現在の岡田宮である岡水門(おかすのと)に逗留していることで判断できます。

浪速までの瀬戸内海の航路では安芸の埃宮(えのみや)と吉備の高島宮での滞在が長く、そして航行の難所の明石海峡や浪速の津(港のこと)がある。安芸は出雲に近く、東征当時であれば出雲支配の強い地域でした。出雲との交流と安芸の港湾の開発、国つ神(くにつかみ)の支援があり、この航路で最も強い勢力を持つていた吉備に逗留し、軍備の増強と整備を図る。両地域の豪族からも大歎

参照資料1-1:神武東征の行程



出典:ウイキペディア

待されることで強いつながりがあったことが分かる。明石海峡や浪速(なにわ)の津(港)は潮の満ち干時の波の速さに熟練の船頭なしでは操舵できなくなるからである。明石海峡は渦を巻いて流れ浪速の渦は難波(なんば)と言われるほど当時は着岸が難しかった。国つ神である豪族がその手配を支援したのであろう。

一方、浪速から熊野灘を廻つて大和へのイワレビコ(イワレビコ)の行程は、そこでの国つ神が敵味方に分かれてイワレビコに立ち向かう「戦いの行軍」になる。最初の戦いの難波で長髓彦(ナガスネヒコ)との戦いに敗れ、イワレビコ(イワレビコ)の長兄、五瀬命(イツセノミコト)を喪う。熊野への回航では紀伊川(紀伊川)の河口の名草邑(なぐさむら)での戦いがあり、初勝利するが、その後の航行において熊野灘の荒波でさらに二人の兄を亡くします。イワレビコ(イワレビコ)の身内がほとんど居なくなり、家臣との信頼関係で行軍を進めざるを得ない状況に陥る。熊野の丹敷浦(にしきうら)に上陸し、大和を目指すが、熊野の神の怒りに触れ全軍が気を失い倒れる。その時、高天原からの最初の救援を受ける。天照大神の命によって、一横刀(たち)を受けて窮地を逃れ、加えて八咫鳥(ヤタガラス)が遣わされ、その導きのもとに大和に向け歩を進める。大和に向かう途中の吉野、宇陀(うだ)、城島(きしま)、そして目的地の橿原(かしはら)に至るまで敵味方に分かれた国つ神の激しい抵抗を受けます。それぞれの場で抵抗に対処して勝利し、最後の戦いの城島(きしま)で饒速日命(ニギハヤヒノミコト)が長髓彦(ナガスネヒコ)の軍隊を引き連れ、イワレビコ(イワレビコ)に帰順し神武東征の行程は終焉する。この浪速(なにわ)からの後半の行程は、イワレビコ(イワレビコ)という皇軍にもかかわらず、苦難の行軍を強いられたことを記紀は記述する。おそらく、北九州の文化を持った集団が大和を目指して抵抗する敵を倒し、治めるまでの苦難の経験が言い伝えとしてあり記述されたものであろう。この苦難を具体的に記述していることにも現実性を感じとれる。

神武天皇(カムヤマト)が稲作を広めたという伝承が神武東征にはあり、水田農耕の始まりを想起させる。水田農耕は弥生時代前期に九州から西日本に普及し、生産性が飛躍的に向上する水田耕作が導入されてからの大和の人口は急激に増加する。弥生時代末期、約六十万人であった人口が奈良時代前には四五〇万人になる。この弥生時代に稲作技術を広めた歴史的行動があったことは間違いない。それが神武東征かもしれない。

第二話 イワレビコノ誕生

神武天皇が天皇になるまでの古事記での正式名称は神倭伊波礼毘古尊(カムヤマトイワレビコノミコト)である。長々しいので以下、「イワレビコ」という。天孫降臨をされた瓊瓊杵尊(ニギノ命)の曾孫に当たり幼少名を「狭野尊(サノミコト)」といわれた。

神武天皇が大和に橿原(かしはら)宮を造営した際の言葉が日本書紀にある。この言葉に東征への想いが表されている。「六合(りくごう)、またはくにのうち)を兼ねて都を開き、八紘(はちくおう)を掩(おほ)ひて宇(いえ)と為さむこと、亦可(よか)らずや」とある。意味は、「四方の国々を統合して都を開き、天下を覆って我が家とすることはなほだ良いことではないか」という国造り宣言である。



参照資料1-2: 平和の塔 宮崎平和台公園

出典: ウィキペディア



真人を表現「荒魂 あらみたま」

海人を表現「奇魂 くしみたま」

農神人を表現「幸魂 さちみたま」

高工人を表現「和魂 にぎみたま」

この宣言は「八紘(はちくおう)一字(いちじ)はつこういちじう」と言われるもので、国家を家と捉え、大和朝廷を一家の主、各国を家族にし、仲良く暮らしていこうというものです。イワレビコが出生し、東征を開始する日向の宮崎平和台公園に昭和十五年(一九四〇年)を記念して平和の塔が建てられました。この塔の四隅には神武の四面性を表す四魂、「荒魂」「和魂」「幸魂」「奇魂」が配されています。神道では「一霊四魂」といい、その意味は人の靈魂は天と繋がる「一霊」「直霊(なおひ)」と四つの魂から成り立つという靈魂観です。四つの魂とは、
「荒魂(あらみたま)」とは、勇気を表し、前に進む力で荒々しさの神靈
「和魂(にぎみたま)」とは、親しみを表し、人と親しく交わる神靈
「幸魂(さちみたま)」とは、愛を表し、人を愛し育てる、幸せにする神靈
「奇魂(くしみたま)」とは、智を表し、物事を観察し分析し、悟る力を持つ知性の神靈と言われます。イワレビコはこの四魂を強く備えた人物であったということです。

記紀から伺える東征の重要な目的は、軍事行動だけではなく、三つの文明である「稲作」と「鉄器」、そして「灌漑技術」を伝播し、支配して行った旅ではないのかと考えられる。それは美土(うましつち)、いわゆる水稲に適した土地を求

参照資料1-3:貝輪

出典:ウキペディア



め、東征のゆかりの地で井戸を掘り、灌漑の施しをする記述から伺える。東征の期間は古事記では十六年間、書紀では六年間かかったとされる。この期間の違いは安芸(あき)と吉備(きび)の滞在期間が大きく影響している。古事記では安芸と吉備はそれぞれ七年、八年であるが、日本書紀ではそれぞれ二か月、三年である。長野正孝氏著「古代史の謎は海路で解ける」によれば、瀬戸内海航路が出来ていたとみるか、航路と港を啓開(港や航路を開発すること)しながら進んだのかの違いであろうと言われる。確かに安芸と吉備は瀬戸内海航路では枢要の港の地であると述べられている。

イワレビコの生誕地は日向の皇子原(おうじげん)にある。ニギノ命が天孫降臨された高千穂の峯の近くに位置する。

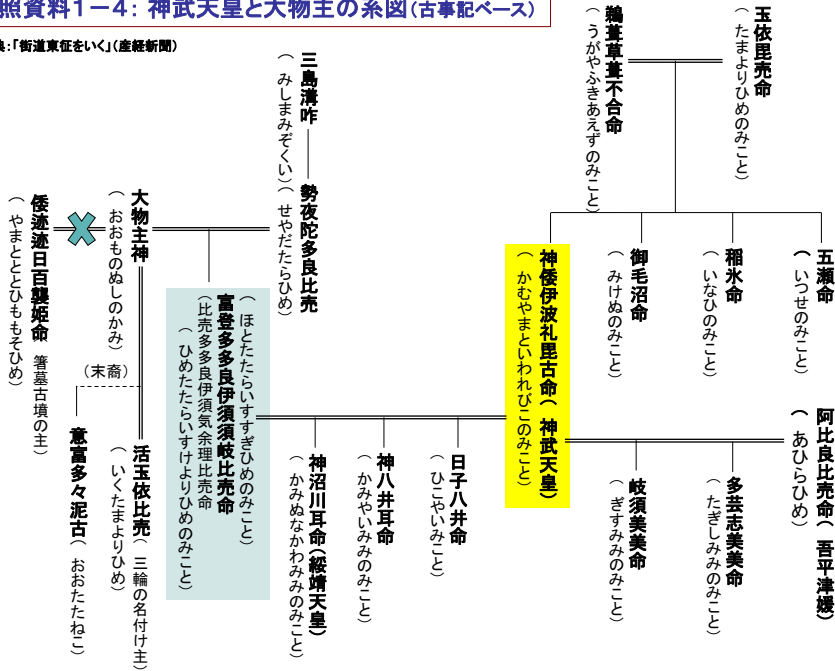
「天皇生まれながらにして明達(さか)しく、意かたくまします。」(日本書紀)とある。皇子原には隣接して狭野神社(さのじんじや)があり、イワレビコの幼少名は「狭野尊(サノミコト)」という。皇子原は宮崎平野を潤す大淀川の源流にあり、現在のえびの市と都城市の中間にあり、この一帯は水稲が可能である。都城市やえびの市界隈で初期稲作の石包丁や土器が出土しており、稲作先進地であったことに間違いはない。

この地域の出土品から南西諸島との交流があったことが判っており、最近のDNA鑑定では日本の米はジャボニカ米であり、南西諸島経由のルートで稲作が伝来した可能性が高いと言われている。そのことは、イワレビコが吾田(アタ)村の吾平津姫(アヒラツヒメ)を娶ることからも明らかになる。吾田村は薩摩半島西部で貝輪交易が盛んなところであった。それは吾田村の高橋貝塚から貝輪が出土することで分かる。貝輪とは沖縄周辺産の大型の貝から作る腕輪で、后や姫にとつて高価な必需品であり、その流通は九州北部や瀬戸内海東部まで流通していた。イワレビコが東征をする財力は貝輪貿易による収益で力を蓄えたのかもしれない。天孫降臨したニギノ命が正室の木花之佐久夜毘売(コノハナサクヤヒメ)もこの地から娶ったと記紀に記述することから、歴史上で重要な地であったことが判る。

東征開始時に、アヒラツヒメはイワレビコの足手まといになることを気遣い、同伴せずイワレビコを見送った。イワレビコを見送るアヒラツヒメの像が、現在の日向市油津港にある吾平津(アヒラツ)神社にあり、アヒラツヒメが祭神として祀られている。イワレビコの皇居は皇宮神社として宮崎神宮から西北約六百メートル先の丘にある。イワレ

参照資料1-4: 神武天皇と大物主の系図(古事記ベース)

出典:「街道東征をいく」(産経新聞)



ビコは十五歳になるとこの地に移り、四五歳で東征を始めるまでここに住んだ。地名起源の視点から「宮崎」とは宮(皇宮)の崎(前)の意味ではないかと言われる。皇宮神社は大和朝廷成立後、九州に下向してきた皇孫の建盤龍命(タケイワタツノミコト)がその縁に因んで創祀し、崇神天皇の時代に社殿が創建された。

出雲の国譲りの後の神武東征の目的のもう一つは、出雲に替わって葦原中国を治めることにある。しかし、当時の大和は三輪山の主、大国主神の幸魂・奇魂である大物主大神(オオモノヌシノオオカミ)の影響が強く残っていた。つまり出雲の国つ神の大国主神(オオクニヌシノカミ)の関係者が多く居たことになる。

神武東征は、イワレビコが橿原宮(かしはらぐう)で神武天皇と称し、大物主命の娘と婚姻を結び、出雲勢力の支援を得て大和を治めることで完了し、国譲りが完結することになるのである。

ここで、イワレビコの神武東征に係る神々を整理しておこう。イワレビコはニギニ命の孫である鵜葺草葺不合尊(ウガキフキアエズノミコト)と海神(ワダツミ)の娘である玉依毘売命(タマヨリヒメノミコト)の間に生まれた第四子である。長兄に五瀬命(イツセノミコト)、次兄に稻氷命(イナヒノミコト)、三兄に御毛沼命(ミケヌノミコト)があり、イワレビコの東征に随伴する。イワレビコは二人の妻を娶る。日向に居た時の阿比良比売命(吾平津媛:アヒラツヒメ)、もうひと方は東征完了後、大和で大物主命の娘、富登多多良伊須須岐比売命(ホトタタライススギヒメノミコト)、別称は比売多多良伊須余理比売命(イスケヨリヒメノミコト)である。長い名なので一般には、伊須余理比売命として使用される。

参照資料1-5:都農神社



出典:ウイキペディア



三輪山の神、大物主神は三人の妻を娶っている。農耕神である三島溝咋(シシマヅクイ)の娘、勢夜陀多良比売(セヤダタラヒメ)との間に伊須気余理比売命をもうける。神武天皇の后となる。その他に、倭迹迹日百襲姫命(ヤマトトトヒモソヒメ)は箸墓古墳に埋葬されたといわれる后であり、また活玉依比売(イクタマヨリヒメ)がいる。この比売は夜にか会えない大物主命を見極めようと大物主命に糸を括り付け、翌朝括り付けた糸を辿って夫君を見届ける。その時、糸が三輪残っていたところから、その山を三輪山と名付けたという謂れのある比売である。神武天皇と伊須気余理比売命の間には三子があり、末弟の神沼川耳命(カミヌナカワミミノミコト)が第二代天皇として綏靖天皇(スイゼイトエンノウ)を名乗る。吾平津媛(アヒラツヒメ)との間には二子があり、神武天皇の死後紛争を巻き起こす。

第三話 大和思慕

日本書紀では、イワレビコは東征は塩土老翁(シオツチノオジ)に尋ね、翁が「東に美地(うましつち)あり。青山四周(せいざんよもにめぐれり)」と云う。意味は、東方に青い山々に囲まれた美しい土地がある。その中へ天の磐舟に乗つてとび降りた者がある。とび降りた者は饒速日(ニギハヤヒ)というものである。そこへ行って都を造るに限る。」と、この言葉を受ける。この地にはイワレビコと同様に、既に高天原から天孫降臨した同族神(天つ神)が居るといふことになる。イワレビコは「何れの地(ところ)に坐(いま)さば、天の下の政を平らげく聞(こ)し看(め)さむ。なを東に行かむと思ふ」と天下の政治を無事に行えるところを悩み、東に向かう決意を兄に語り東征を決意する。

ワレビコは注四五歳の時、皇宮神社の北に位置する湯之宮神社で最初の軍議を開き、東征を開始する。湯之宮神社はイワレビコが東征の最初の宿泊地とされる神社で、最初の軍議を開いたとされるこの地の白梅の座論梅があり、隣接してイワレビコが湯あみしたと伝えられる御浴場之跡がある。

(注) 古代の年齢の数え方は魏志倭人伝にある「春耕秋収を記して年紀となす」にあるように、春に苗を植えて秋収穫するのを一歳とするから一年で二歳を取ることになる。雄略天皇の前までは二歳一年と見るのが適切と言われる。

参照資1-6:耳川 美々津港、立磐神社



出典:ウイキペディア

参照資料1-7:参考図:おきよ祭り



出典:ウイキペディア

ツオノミコト)、表筒男命(ウワツツオノミコト)を祭る。大和朝廷が航海の三神として崇めた神であり、住吉大社の祭神です。この港にイワレビコの船出に係る「おきよ祭」が残り面白い。その謂れは、物見番から潮も風もちょうど良い

とが訛つて美々津になった。大船に適した良港で船を作る木材、楠(くすのき)に事欠かず、技術を持った人がいる。立磐(たていわ)神社の辺りを中心に今も楠の群生林がある。楠は樟脳油を含むため耐久性、保存性に優れている。元々、この美々津港に注ぐ耳川(みみがわ)流域は良木の産地であり、森林に恵まれ、現在でも宮崎県の森林面積の二十六パーセントを占める。東征に向けた軍船を建造し、準備したものと思われま

す。立磐神社の祭神は、神武天皇の他に、住吉大社の三祭神と同じ底筒男命(ソコツオノミコト)、中筒男命(ナカツオノミコト)、表筒男命(ウワツツオノミコト)を祭る。大和朝廷が航海の三神として崇めた神であり、住吉大社の祭神です。この港にイワレビコの船出に係る「おきよ祭」が残り面白い。その謂れは、物見番から潮も風もちょうど良いとが出来る。次に向かった地は美々津港がある美々津(みみつ)である。立磐(たていわ)神社の辺りを中心に今も楠の群生林がある。楠は樟脳油を含むため耐久性、保存性に優れている。元々、この美々津港に注ぐ耳川(みみがわ)流域は良木の産地であり、森林に恵まれ、現在でも宮崎県の森林面積の二十六パーセントを占める。東征に向けた軍船を建造し、準備したものと思われま

九州は宮崎から北九州の岡田宮まで、瀬戸内海の行程は岡田宮から浪速までになる。最初の逗留地は軍備の備えのための都農(つ)である。

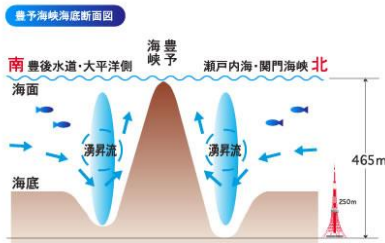
都農町に矢研(やと)ぎの滝がある。矢を研いで軍備を整えた場所と言われる。この地は山と海の距離が近いために食物が得やすい。また、矢研ぎの滝を上ると、尾鈴山(おすずやま)がある。この山には火成岩の石英斑岩(せきえいはんがん)があり、矢じりに適した石が潤沢に取れる。矢の材料になる矢竹も茂っている。当時、軍備で最強の武器である弓矢の準備に最適の地である。この地に都農(つ)神社がある。祭神は大己貴命(オオナムチノミコト)である。大己貴命は出雲の大国主命の若年時の名前である。その場所で弓矢の準備をしたということは出雲の勢力と協力するという意思の表れと見ることが出来る。次に向かった地は美々津港がある美々津(みみつ)である。

美々津港は、イワレビコが船出された港ということで御津(みつ)と呼ばれることが訛つて美々津になった。大船に適した良港で船を作る木材、楠(くすのき)に事欠かず、技術を持った人がいる。立磐(たていわ)神社の辺りを中心に今も楠の群生林がある。楠は樟脳油を含むため耐久性、保存性に優れている。元々、この美々津港に注ぐ耳川(みみがわ)流域は良木の産地であり、森林に恵まれ、現在でも宮崎県の森林面積の二十六パーセントを占める。東征に向けた軍船を建造し、準備したものと思われま

参照資料1-8:速吸之門(豊予海峡)



出典:ウィキペディア



にたき火で見送ったという故事が残っている。井戸は「神の井」と命名され、焚火は「トンド火祭り」として現在も年一回催されている。イワレビコは水脈を知る井戸と灌漑の技術を持つて伝えていったのであろう。

豊予海峡は速吸之門(はやすひなと)と呼ばれる。現在、佐賀関の関サバ、関アジで知られる処である。大分県大分市(旧佐賀関町)の関崎と愛媛県伊方町(旧三崎町)の佐田岬によって挟まれる海峡で海峡幅は十四キロメートルしかなく、最大水深は約一九五メートル。日本最大の断層である中央構造線がこの岬の間を走るため、深層流との対流が起こる場所である。魚にとつては豊饒の海になるが、航海は難渋を究める。ここに、助っ人珍彦(ウズビコ)が現れ、「天

第四話 御船出

の知らせがあり、八月二日の船出予定を一日に急ぎよ繰り上げ変更し、八朔(はつきく、八月一日)午前四時に変更した。裏方は大慌てで、餡(あん)ともちが一緒になった団子「つき入れ団子」を作り献上した。子供たちが朝四時の出船に向けて、「おきよ！おきよ！」と言ってイワレビコ軍勢を起こして回る。つき入れ団子がお土産として今も売られている。戦前までは船出の様子も演出したらしい。そして、船出したイワレビコの軍団は大入島(おおにゅうじま)を廻り豊予海峡に向かう。

参照資料1-9:速吸日女神社(蛸神社)



参照資料1-10:宇佐神宮



神(あまつかみ)の子来(い)でますと聞(う)けたまを(り)、故に即ち迎え奉る」と言い、イワレビコ軍船の先導役を務める。海
の豪族と想定できるが、東征ではイワレビコの側近的役割を終始果たしていく。後に大和の国造(くにみやつ)この祖として
取り立てられ、イワレビコは「椎しひ根津彦(うしひねつひこ)」の名を与えている。

この豊予海峡の関崎に早吸日女神社(はやすひめじんじや)があり伝承が残っている。この関崎は関様、関アジで現在知ら
れるところである。その伝承とは、この海峡を通る時、急な風雨と荒波に襲われた。椎根津彦が海面をのぞくと、海底か
ら異様な光がさしていた。そこで、従えていた海女の姉妹を潜らせると、光の源は神剣で大蛸が守護していた神剣を差
し出した。この神剣はイザナキが絶えず佩(は)いていたもので、権現礁(ごんげんべい)で禊(みそぎ)の最後に海底へ沈めた。
大蛸はその神剣を預かり守護していたものである。大蛸はイザナキの子孫が来たことを喜び神剣を返したのである。

海女の姉妹はその神剣をイワレビコに届けると長時間の潜水がたたって息絶えてしまう。イワレビコは海女の姉妹を手厚
く葬り、神剣をご神体とする小さな祠(ほこら)を建て、イザナキが禊の時に生まれた八十柱津日神(ヤソマガツヒノカミ)
を祭神として建国の大請

願を立てたと伝わる。早吸日女神社(はやすひめじんじや)では、参
拝者が願い事が叶うよう蛸の絵と蛸を食(く)べない期間を書いて貼る。
「蛸断ち祈願」と言われる。同神社の三十九代宮司の小野氏は代々
一生涯蛸を食(く)べないと云うから蛸断ちが千年以上続いていること
なる。この関崎を廻ると宇佐に着く。

イワレビコは柁鼻(かじはな)の地に上陸し宇佐へ向かったと書紀に
ある。宇佐は豊国(とよくに)と言われ、宇佐の民は宮を造り歓待し
た。現在の宇佐神宮の場所になる。「宇沙都比古(ウサツヒコ)・宇沙
都比売(ウサツヒメ)は足一騰宮(あしひとつあがりのみや)を造り、
大御饗(おおみあえ)を献(たま)てまつる。」と古事記に記される。^{注足}
一騰宮とは片方の一柱が川の中あつた宮殿ということを表してい
る。(注)宇佐神宮を周る寄藻川(よしもがわ)があり、この川沿いに足一騰宮の
遺跡が残っている。

この歓待にイワレビコは喜び、家臣の天種子命(アマノタネノミコト)
に宇沙都比売を娶(よ)むことを進める。地元有力者と家臣の姻戚関係
は宇佐が支配下にあり、大和との関係も深かったことが分かる。天



種子命は三ギノ命の天孫降臨時の随伴神である天児屋根命(アマノコヤネノミコト)の孫であり、その子孫は中臣氏から藤原氏へとつながる血筋である。宇沙都比売(ウサツヒメ)が天つ神と婚姻できるということは天つ神に関わる一族であるということになる。

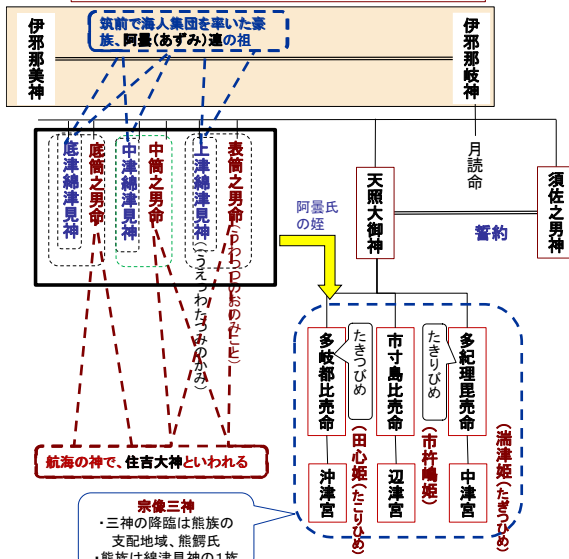
宇佐市には九州最古と言われる三世紀後半の前方後円墳、赤塚古墳がある。三世紀後半と言えば大和の最初の前方後円墳が三世紀中葉と言われているので、ほぼ同時期に構築されたものである。副葬品として三角縁神獸鏡四面・三角縁龍虎鏡一面、碧玉管玉、鉄刀片、鉄斧などが出土している。銅鏡は、椿井大塚山古墳(京都市)、石塚山古墳(福岡県)、原口古墳(同)出土のものと同範範鏡(どうはんきよう)であるとされており、初期のヤマト王権が各地の首長に与えたものであると考えられている。(注)「同範鏡」の意味は同じ鑄型または原型から作られた鏡のこと。

このことから、日向と宇佐は海路を通じてかなりの親密な交流があり、大和朝廷に忠誠した、あるいは同族の国家だったと考えて差し支えないであろう。宇佐を発つと次の寄港地は岡田宮(おかだのみや)である。

岡田宮(筑紫)は、現在の北九州市八幡西区にあり、関門海峡に接した場所にある。イワレビコは竺紫(つくし)の岡田宮で一年間滞在する。北九州の要衝の地で抑えておかないと大和(の)航路を確保できなくなる地である。岡田宮の伝承によれば、岡地方(おちほう…遠賀郡)を「治めていた熊族が祖先神を祭っていた社(古事記)」と言われる。元宮の一宮神社にはイワレビコが祭祀を行った祭場跡「磐境(いわさか)」が残る。

祭神に神日本磐余彦命(神武天皇)を筆頭に、岡田の宮の右殿の熊手宮に大國主命、少名彦神、県主熊罴命が祭られている。宮司は熊罴命(クマワニノミコト)の末裔の熊罴氏である。この祭神を見るとこの関門海峡を当時は熊罴族が牛耳っており、祭神からは出雲の大國主命の支配から、大和朝廷の支配へと変わったことが推察できる。愈々、中国地方の安芸に向かう。大和朝廷発足後、県主に任じられたということは臣下の礼を執り協力したということである。この地の滞在の一年いたのは、熊族は海を中心の生活だったから、イワレビコがコメの安定性を教え、より幸せになれると思わせるために、稲を実際に栽培して伝授した一年という可能性が高い。米は一粒で三百粒を作り出す非常に生産性が高く、安定性のある作物であった。岡田宮の祭神の熊罴命は熊族の祖神であり海神(ワダツミ)である。海神は紀元前から古代大和が出来るまで北九州の沿岸を中心に活躍し、

参照資料1-12:海神と熊罴族の位置づけ



出典：古代筑紫三家族の謎(gooブログ)、「古事記」(竹田恒泰著、学研)

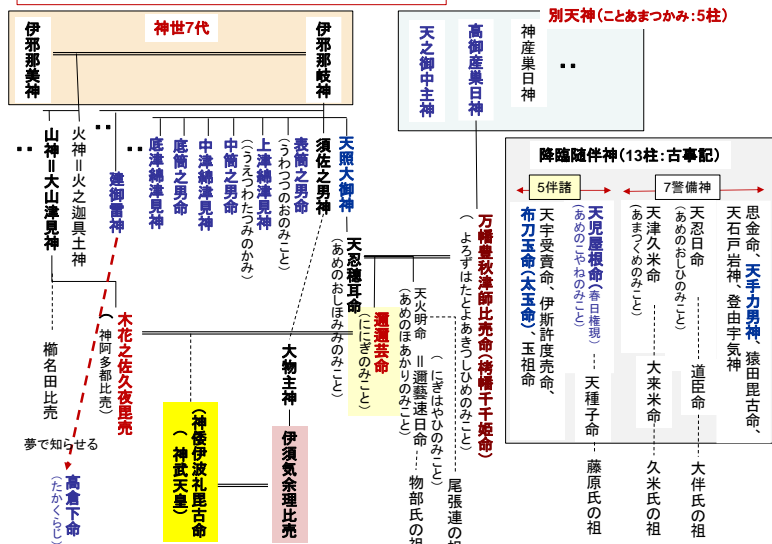
綿津見三神と住吉三神から見れば人間界でいけば姪に相当するから宗像族はより後に阿曇族から分岐したことを表している。この三女神は宇佐大社と宗像大社の祭神である。このように見ると、要になる関門海峡を占めていた熊族は北九州の文化が大和に移動する時の神武東征で記述されるのだから、住吉三神の後に阿曇氏から分岐した一族といえる。

「記紀で伝えていることは阿曇族が最初に海神としてあり、その枝族として住吉族が出てきたということである。さらに、伊邪那岐命が目を洗った時成った神が天照大神であるから、綿津見三神と住吉三神は人間の世界では兄弟神になる。その天照大神神と弟の須佐之男神の間の注誓約(うけい)で多岐都比売命(たぎつびめのみこと)と、市寸島比売命(いちさしまびめのみこと)、多紀理毘売命(たきりひめのみこと)の宗像三神が成る。(注)固く誓うこと。また、その誓い。

住吉族になる。(注)神の子孫のこと。
 記紀によると綿津見三神は伊邪那岐命が黄泉(よみ)の国から逃げ帰り、筑紫の日向の小戸の橋の檍原(あわきはら)で禊(みそぎ)をされた時に、海の表面(上津)、中ほど(中津)、海底(底津)で綿津見三神が成ったと記す。そして、綿津見神が成ったすぐ後に表筒之男神、中筒之男神、底筒之男神の住吉大社の住吉三神が成っている。この注神裔(しんえい)が住吉族になる。(注)神の子孫のこと。

最先端の武器、操舵術、文化を有していたと思われる。それは北九州の沿岸部を中心として銅器、鉄器、陶磁器、古墳等の遺跡が集中することから判断できる。最古の倭国に対する記述は後漢書で紀元前五十七年に贈った漢奴倭国王の金印の記述である。このことから、この年代以前に大陸との交流が活発に行われ、そのための渡しの神と言われる船頭(海神)が居たことになる。金印は志賀島で江戸時代に発見されたがこの近くに志賀海(しかうみ)神社がある。将に海神にはもってこいの玄界灘の荒波を避ける良港の地形である。祭神は上津綿津見神(ウツワタツミノカミ)、中津綿津見神(ナカツワタツミノカミ)、底津綿津見神(ソコツワタツミノカミ)の三神である。この神裔(神の子孫のこと)が阿曇(あずみ)族であると社伝に記す。一説によると奴国(なこく)はこの阿曇族が持っていた国ではないかと言われるのは頷ける。

参照資料1-13: 神武東征で関係する神々系図



出典: 『海道東征』をゆく(産経新聞社)、『古事記』(竹田恒泰著、学研)

コラム: 「神武東征で臣下として係る神々系図」

イワレビコ(神倭伊波礼毘古命)は須佐之男神の六代目の出雲の大神に当たる大国主命の幸魂(さちみたま)、奇魂(くしみたま)である大物主神(オオモノヌシノカミ)の娘である伊須気余理比売(イスケヨリヒメ)と結婚し、橿原宮(かしはらぐう)を建て神武天皇として初代天皇となる。大物主神は三輪山の神であるから、大和の地を治めていたのは出雲を中心とした勢力であったことが分かる。イワレビコは出雲勢力との調和を執ったのであろう。

神武東征での同伴者は三人の兄のみではなく、天孫降臨の随伴神の子孫がイワレビコの臣下として同行する。

天兒屋根命(アメノコヤネノミコト)の子孫で藤原氏の祖になる天孫命(アマノタネノミコト)、天津久米命(アマツクメノミコト)の子孫で久米氏の祖になる大來米命、天忍日命(アメノオシヒノミコト)の子孫で大伴氏の祖になる道臣命(ミチノオノミコト)である。古代大和発足時の側近の豪族である。

熊野路でイワレビコの軍団が熊野の神の毒気に当たり倒れた時、高天原の建御雷神が一横刀(たち)を下ろし、イワレビコに届けさせたのは高倉下命(タカクラジノミコト)、そのことでイワレビコ軍団は窮地を脱する。

東征の最終地、城島(しきしま)で対抗する長髓彦命(ナガスネヒコ)の軍団を引き連れイワレビコに投降するのはニギノ命の兄神の天火明命(アメノホアカリノミコト)の子孫、邇藝速日命(ニギハヤヒノミコト)である。物部氏の祖神と云われ、古代大和で軍事と祭祀の二大機能を持ち勢力をふるうことになる。